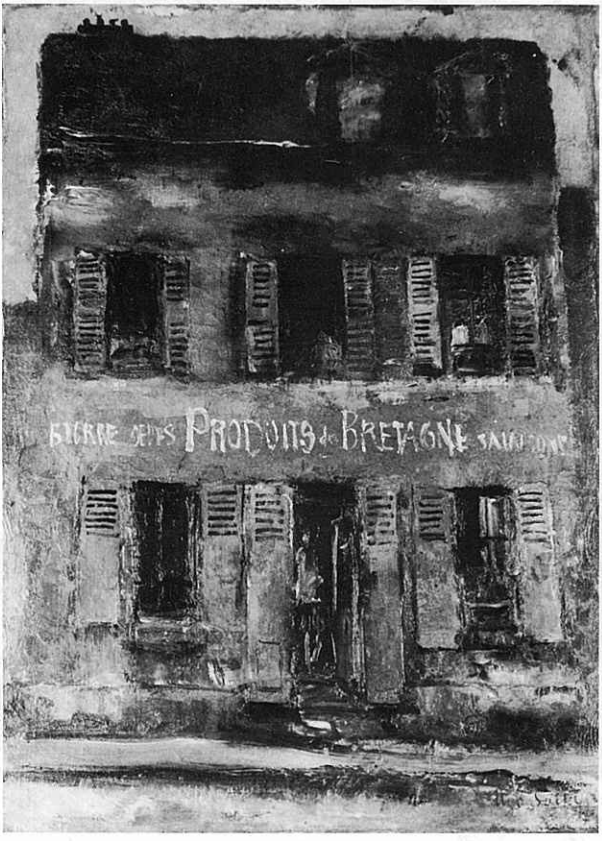
昭和56年8月1日

# 佐賀県立博物館報 No.53

佐賀市城内1丁目15番23号　TEL 0952(24)3947




## 八百屋　佐伯祐三（一八九八―一九二八）

佐伯祐三は、明治三十一年、現在の大阪市に生まれる。中学校四年生の頃から油絵を描きはじめ、十九歳のとき上京、川端画学校洋画部で藤島武二の指導を受ける。翌大正七年東京美術学校西洋画科に入学、五年後の大正十二年卒業した。卒業すると同時に、夫人と子供を伴い渡仏、パリを中心に古都の街を描き、佐伯の独自性を高める。二年の滞在の後帰国、第十三回二科展に多数出品し、二科賞を受ける。しかし、昭和二年早くも彼は、再び大阪を出立、二度目のパリへ向かう。日に何枚も描くことが続き、翌年の三月、体に巣くう病に倒れる。その後病状は回復せず、八月十六日、パリ郊外の病院で死去する。三十歳であった。

目　次

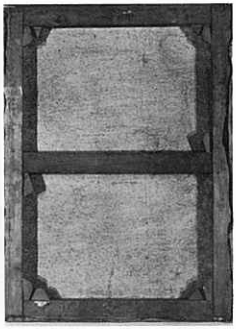
○資料紹介1　「八百屋」　佐伯祐三……1～3
○資料紹介2　鍋島光茂・小倉女関係文書……4～5
○資料調査メモ　肥前の鐘(1)　肥前新鐘考……6
○県内博物館案内（その9）　有田町歴史民俗資料館……7
○行事のお知らせ……8

## 資料紹介（1）

### 八　百　屋

**品　質**　油彩・麻布
**大きさ**　73.3×54.4(たて×よこcm)
**サイン**　朱字「Uzo Saiki」(右下隅)
**作　者**　佐伯祐三
**年　代**　1925（大正14）年

№1　修理前　横光線



№2　修理前　裏面

当資料は昭和54年度に修復された。現在は当館保管であるが、これまで、佐賀県知事公舎の一室に掲げてあったもので、いつごろ、どういった事情で佐賀県に持ち来されたのかは詳らかでないが、昭和53年5月に発見されている。

作品は、顕著な絵具の剝落は見られないが、画面全体にヒビ割れが目立っている。(写真№1)ただし、絵具の麻布に対する固着は案外と安定しており、絵具のヒビ割れに伴う浮きは見られない。

修復は、画面及び裏面の殺菌、つぎにオランダ法による裏打、洗浄を行った。なお、画面周辺部に、溶剤型アクリル絵具で補彩を施している。

作品はほとんど旧状に復したが、画面全体から受ける暗く沈んだ印象は、作品が本来持っている特質と思われる。

画面は、正面向きに2階屋を描き、建物の上、下階の鎧戸は開かれ、窓もあけられている。中央の入口に女性が立ち、路上を眺める風情である。建物の中央に横に書かれた文字は、左から「BEURRE OEUFS PRODUITS de BRETAGNE SALAISONS」と読める。訳すならば、さすずめ「ブルターニュ産物品、バター、タマゴ、塩物」といったところで、ここから、本作品の題名が「八百屋」とされてきたのであろう。なお、写真№2の画布裏の写真によると、麻布の枠板の左端に、「佐伯祐三　八百屋」の貼付紙がみえる。

画面右下隅に朱色のサインが記入されている。文字は、「Uzo Saiki」と読める。(写真№3)

賦彩は全体に暗い。まず屋根は、ほとんど黒に近い褐色である。屋根の周りにかすかにのぞく空は、白っぽい灰色で、屋根の黒さを強めている。二階の壁は、煤けた感じの黒っぽいねずみ色で、開かれた窓の奥は暗く奥まっている。窓際に、らせん状に絵具を引っ掻いた跡がある。一階の壁面は、上階とは対称的に、やや明るく、にぶい緑味のある青を使用している。横に書き入れられた文字は、白色である。建物の前の舗道は灰色に流れて、その中央に黒く横筋を描き入れている。

この縦長の画布に、きっちりと納まるかたちで描かれた正面形式の画面に、唯一アクセントを与えているのが、店の入口に立つ特徴的な人物である。一刷毛で描かれたような人物は、上衣を朱色に着色された婦人像である。右下隅のサインは、この婦人の朱色に対応するように朱の同色である。

本作品は、以上の構図及び色彩の特徴からみて、佐伯祐三の作と考えられる。また画面上のサインの記入が、このことを確信させる。

ここで、佐伯のサインについていま一度みてみたい。また、このことは、年紀の記入がみられない本作品の制作年代を窺う上でも、役立つと思われる。

サインについて

佐伯のサインは、6種類が数えられている。この中、本作品のサイン「Uzo Saiki」が使用されるのは、(一)[註1]の場合で、1925年のパリ時代から帰国後の下落合時代[註1]までのことである。同じパリ時代のサインでも、1927、28年のサインとでは、筆勢が異なっている。

また、1925年以前とでは、まず、1923年の東京美術学校の卒業制作の自画像が、「Y, Saiki」と署名したのが最初期で、翌1924年のパリ到着後は、サインが見られなくなる。

再びサインが見えるのが、1925年、パリ郊外のクラマールから、市内のリュ・デュ・シャトーに移り住んでからのことである。この年に描いた作品で、ユトリロ風の構図を持った作「エッフェル塔の見える通り」は、画面左下隅に「Uzo Saiki」と記している。

この1925年のサインは、また三種類が見られる。それは、「Uzo, Saiki 1925」「Uzo, Saiki a paris」であったり、あるいは単に「Uzo, Saiki」とすることである。

佐伯が、第一次のパリ滞在を終え、帰国の途につくのが翌1926年の1月上旬であることからみて、滞仏期の本作品が、そのサインの特徴から、1925年に描かれたもの

№3　サイン

であることがわかる。

ここで、本作品のサインの特徴として、その色を挙げておきたい。それは、佐伯のサインのほとんどが黒色の書き込みであるのに反し、当サインが（赤褐色に近い）朱色であるということである。このことは、当作品の作者を佐伯に帰するに、あるいは否定的要素ともなり得るが、この色は作品全体の配色効果についての考慮からのことと考えられ、佐伯の数少ない例外のひとつと思われる。(註2)

様式について（1925年の佐伯）

佐伯祐三は、明治31年（1898）に浄土真宗光徳寺（大阪市）に生まれた。油絵は中学生の頃からで、当時、赤松麟作の画塾に通った。大正12年（1923）東京美術学校西洋画科を卒業、この年の11月、渡欧（第1次）の旅につく。明けて1月、パリでは、里見勝蔵を頼ることになる。主にパリ郊外に住し、風景画を描く。この時の作品にはヴラマンクの影響が濃い。11月に入り、パリ市内のアパートに移る。ここで、佐伯は、妻と子供とともに、大正14年（1925）を過ごすことになる。佐伯のパリの始まりである。それはまた、ユトリロが佐伯の中に入ってきた年であり、佐伯のパリは、ユトリロのパリを追うことから始まっている。この時期、作品にはサインが見られない。

やがて7月に入り、佐伯は兄の訪問を受ける。この兄のパリ到着前後から、ユトリロのパリの中に、佐伯のパリが点影として現われてくる。それは、ポスターや、画面を引き立たせる人物への興味であったりした。そのことは、佐伯のパリ市街に対するいわば遠視的な見方から近視的見方への変化の始まりと言える。以後、彼の画面には、街の古い店構えや、ポスターが貼られシミが浮いた壁が登場することになる。それとともに、サインの記載が始められている。

11月、佐伯は手紙の中で、「……今自分のキョウ地ヲ見付けたいのであへいでゐる、大分見付けてきたのだ」と記し、佐伯は自己の世界を急速に拡げようとしている。(註3) このキョウ地とは、ヴラマンクの言う物質感と、ユトリロに触発されたアンシャン・パリの表出であり、それらは典型的に、パリの人々の顔のしわを刻み込んだような、古くて汚れた街並にあらわれていた。彼は、この街並の一つひとつをのぞき見るように、建物の正面から描いている。

佐伯のこの正面性の強調は、平面との格闘を意識的に、はっきりと画家の姿勢として行うということである。それは、キャンバス全体を「壁」で覆ってしまうところに端的に現われているように、平面芸術としての絵画を、それまで、遠近法という錯覚の世界に閉じこめられた姿から、本来の位置に引きもどそうとする試みであった。ただ佐伯の場合、そのもっている資質の抒情性ゆえに、彼を分析へと向かわせることがなかったのである。

出品歴について

佐伯は大正15年（1926）3月帰国する。5月には、里見勝蔵、前田寛治、小島善太郎、木下孝則らと1930年協会を結成、5月15日から24日まで第1回展を開いた。佐伯は7点の油彩と4点の水彩を出品した。これが国内での佐伯の初の発表であった。しかし、彼の滞欧作が日本に到着したのは6月であり、先の協会展発表の中には、フランスからの帰途描いたものもあったであろう。

そうした佐伯にとって、滞仏時の成果を世に問う機会が待ち望まれたことは当然であった。ここで帝展か二科会かということになるが、結局、1点しか搬入できない帝展よりも、当時、新帰朝者に優遇的に発表の場を与えていた二科会への出品を決めた。

9月、第13回二科展が開幕した。佐伯はこのとき、特に許されて19点を出品している。このうち、現存が確認されるのは3点であり、また4点については、作品をある程度予想できる。(註4) しかし、これまで、この19点の中で「八百屋」については触れられることがなかった。

今回紹介した作品「八百屋」が、その制作年代、及び様式からみて、第13回二科展に出品された「八百屋」と同じ作品であると考えられるのである。(註5)

佐伯は、ときとして、同じ画題の作品を描いている。しかし、今日「八百屋」として残された絵が、当作品のみであることは確かであり、また、少なくとも、当作品が、佐伯の第一次滞仏期を代表する作品であることは、今後とも変わらないであろう。

註1　朝日晃「佐伯祐三をめぐる謎」（「芸術新潮」昭和43年12月）

一、1924年の、裏面にペンで縦書きした鋭角的な日本字のサイン

二、1925年から次の下落合時代までの筆記体のサイン

三、1927年の、筆の腰が中途で折れ、絵具がくねくねとついて回ったようなサイン

四、「広告」（ヴェルダン）、「カフェのテラス」の活字体のサインで、画面の一部になっている系列のサイン

五、「サクレクール」「白い道」などの、多少不安感を内包するような晩年のサイン

六、「アン・ジューノ」「寺院」などの、読みにくいサイン

註2　同　上

－8Pにつづく

## 資料紹介（2）

### 鍋島光茂・小倉女関係文書

この文書は、昭和55年5月藤本肇氏（東京在住藤本小倉女の後裔）から当館に寄贈されたもので、光茂自筆の書簡11通を、竪34.0㌢長さ624.8㌢の巻子に仕立てたものである。

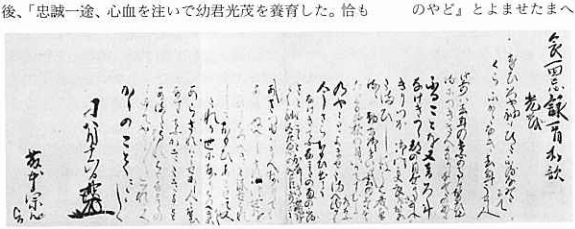
鍋島光茂（1632～1700）は幼名を翁助といい慶安元年（1648）元服の折、将軍家光から「光」の1字をもらって光茂とした。明暦3年（1657）家督を相続し佐賀2代藩主となる。寛文元年（1661）幕府に先立って追腹の禁止を命じたことは有名である。

文学好みの光茂は、佐賀歴代藩主の中でも最もよく和歌を嗜んだ。葉隠聞書によると「適々人と生れ、後々迄名を残す事をせでは無念の事なり。（中略）今の時に名を残すべきは、歌学を遂げ日本第一の宝、武家に於て幽斎ならで類ひもなき古今伝授をいたし一生の思い出にすべし（中略）と思召しはまられ候てより御末期迄に、古今御伝授相済み誠に例なき御事に候。（中略）公の御伝授は西三條家の正統にて、無雙の御秘書迄相渡され、御家に残り居り候事、不思議の次第に候。正統の古今御伝授は、今仙洞様、西三條家、此の御家、此の三所に留り居り申し候由」とある。光茂が元禄13年（1700）5月臨終間際に三條西実教から古今伝授を受けた時、その時の使者がこの葉隠聞書の口述者山本常朝である。

次に小倉女との関係は、光茂の生母（恵照院）の伯母で、光茂の乳母が小倉女である。寛永12年（1635）光茂3歳の時父忠直（佐賀初代藩主勝茂の嫡子）は疱瘡にかかって23歳で没する。恵照院に仕えていた小倉女はその後、「忠誠一途、心血を注いで幼君光茂を養育した。恰も将軍家光の乳人春日局に比すべき賢婦人である。」と葉隠研究家の栗原荒野は評している。事実、小倉女の光茂に対する愛育のエピソードは多い。一つに「小倉殿…翁助（光茂の幼名）御養育に夜書を盡し、片時も離れ申さず、御食事は干物の御汁、花鰹の外には何にても上げ申されず、一人にて守り立て申され候」また「何方へ御振舞に御出での時分は、小倉殿相附き罷越し、御膳の向に据わり居て候て、袂より花鰹を出し、餘の物は何にても上げ申されず候」とあるように万事に気を配っていた。そのため病弱の光茂は達者になったとある。また「小倉殿叱り申され候と申し上げ候へば、御留り遊ばされ候。」とあるように光茂にとっては絶対的な存在であった。小倉女は慶安2年（1649）8月16日江戸屋敷で没した。時に光茂16歳である。

この文書は、第1紙（34.0×51.5）第2紙（34.0×43.7）が光茂より小倉女あての書簡で、小倉女の「やう志やう」（養生）専一を願った内容からすれば5月21日、7月30日付の日付は、いずれも慶安2年（1649）光茂16歳時の筆と思われる。

第3紙（34.0×99.0）は藤本宗心（宗真）あて「寅8月16日（慶安3年1650）」付である。藤本宗真は名を良昭といい、小倉女の兄藤本久兵衛重良の次男で小倉女の養子となる。この文書の頭書は「哀一回忌詠一首和歌　光茂」とあって、続いて『おもひいつや袖もひたふるなみたみて、くらぶかたなき去年うせし人』と想いやるかたなき和歌に始まる。続いて「此歌ハ去年のけふの事ヲおもひ出るにつきさえくもりなみだの雨もふることを、又音ろく斗なげきつつ都の月ながらいにしへきりつぼ[5]御門更衣におくれたまひし後うは君へ被遣るる勅書御せいに『雲の上もなミたニくもる秋の月いかてすむらん朝志ふのやど』とよませたまへるヲを今さらおひも出て『なけ



第3紙　藤本宗心あて書状

第4～5紙　藤本宗心あて書状

きてふなミたの雨のふるさともこことおなしき露やをし袖』又在原の朝臣歌に『あさつゆハきへ残りてもありぬへしたれか此世をたのミはつへき』と詠せられしもおもひあわせて又かくたれか世に残りはつへきにあらされハうせにし人とおもひなすてふ、かきたき事ともあまた侍れともなミたのミにてやうやうこれさへかくのことくに候、かしく、寅八月十六日　丹後(花押)　藤本宗心　まいる」これは慶安3年（1650）小倉女1回忌にあたって光茂（17歳）が前述の藤本宗真によせた手紙である。小倉女なきあとの、いたいたしい光茂の胸中が察せられる。文学青年光茂が泪にくれた毎日はこの後も続く。

第4紙（34.0×48.2）は「妙えつつい善」と題し「そもそも妙悦（小倉女の法名）六十六夜のあかつきに雲にかくるる名残浅からず故今日しもミとセのむかしに月日ハめくり来にけらし、空ももすそも霞なみだを、泪ノ雨にかきくもり詠てだにもなき人の形見の月も見え（ず）かしさおなしなけきの事とおもひ屋りて、『もろともに泪に袖ハぬらしめすきしミとセのけふをなけきて』　干時、慶安四　八月十六日藤本宗心へ」慶安4年（1651）は光茂18歳、最も感受性の強い青年期である。葉隠聞書には「御十九の御年より御歌書御好みなされ候…」とあるが、これまでの文書にみる歌からすれば、これ以前から相当の素養を伺うことが出来る。「光茂公譜考補地取一」に引用している「小食女死去一回忌、扨又三回忌ノ節公ヨリ藤本宗真へ被下御書ニ曰ク（藤本差出）……」とあるのは、この文書を原本としたもので、語句には多少の異差がみられる。

第5紙（34.0×97.2）は、「三月廿一日付藤本宗針（宗真）あて文書、第6紙（34.0×87.0）は、「又七」についての「覚」（明歴四卯月二五日付藤本宗真あて、1658年光茂25歳）第7紙（34.0×46.7）は、「詠秋夕　和歌、中大夫光茂」とあって「さひしさハいつニもおなしことハりをなをやま里の秋のゆふくれ」とあって宛先日付がない。第8紙（34.0×44.0）は、宗真あて「宗真、平兵衛、弥右門尉、三丸権右門　今日の亥一首つゝ則書付す遣也年内宗真」とある。

第9紙（34.0×63.5）は、「尚々返歌待申候尤ゆめゆめ

小倉女肖像

小倉女供養塔

他見有ましき者也（本文略）『なか月の今よひの空に野と宮の秋のあハれそおもひやるゝ』宗真法師○○」とある。

第10紙（34.0×26.4）は、「偽のなき世なりせはの意にてハ候へとも云々」の8行の宛名日付のない書である。

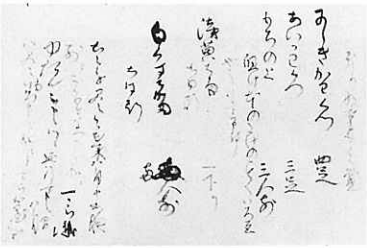
第11紙（34.0×64.3）は、「我が髪束之覚」と題し「しきかわのくつ四足、あいかわのくつ三足云々」13行の宛名、日付のない文章で、「早々と出来八月十五夜前ニここもとに着申候ニ可被越候云々」とある。これはいつの日かの小倉女追善供養のために新調の装束の注文と思われる。光茂の母恵照院は、忠直なきあと初代蓮池藩主直澄（忠直の弟）の後室となる。多感な光茂の母を慕う気持ちはそのまま小倉女を慕うこととなる。この文書は歌人としての光茂の若き日の人間形成の一端を伺うことが出来る貴重な資料である。

光茂は小倉女13回忌にあたってその菩提を弔うため相良求馬と藤本宗真に菩提所建立を命じ、寛文元年(1661)現在の佐賀市愛敬島に小倉山誓宗寺(のち妙念寺と改名)を建立した。初代住持は藤本清左衛門（小倉女の長兄宗甫の祖孫、新左衛門の子）嫡子知観　当時9歳が選ばれ、佐賀城下の願正寺で剃髪し就任した。現在は第9世藤本一成で昭和24年小倉女300回忌が行われた。小倉女の肖像画があり、境内には小倉女を祠った石塔がある。

（資料係長　尾形善郎）


参考文献　光茂公譜考補地取一
栗原荒野編著　校註葉隠
藤本一成著　小倉山妙念寺由緒

第2紙　小倉女あて書状



第11紙　我が装束之覚

## 資料調査メモ

### 肥前の鐘 (1)——肥前新鐘考——

佐賀県の梵鐘は、昭和17年の金属回収で殆ど供出された。供出の対象となったのは、江戸期以降鋳造された梵鐘であったので、現存の唐津市恵日寺の朝鮮鐘（大平6年銘、1026）大和町健福寺の和鐘（建久7年銘、1196）相知町医王寺の肥前鐘（永和2年銘、1376）の慶長期以前に鋳造された古鐘3口は供出を免れた。また県下の半鐘（小型の銅鐘）は例外的に供出を免れたので、これ等は現在、各寺の本堂脇に掛けられている。

現在、県下にみる戦前鋳造の現存する梵鐘はさきの古鐘3口と、武雄市広福禅寺の谷口系梵鐘、塩田町光桂寺の博多鋳造（慶応3年）のもの合わせて5口である。また戦前鋳造の半鐘（喚鐘、殿鐘、報鐘の銘がみられる）は江戸期から明治期にかけて鋳造されたもので、佐賀城下長瀬町で製作された谷口系と、同寺町で製作された樹（植木）系の銅鐘が多くみられる。

谷口系と樹系の半鐘は、その様式が朝鮮鐘と肥前鐘とを混ぜ合わせた和鮮混淆式型の形式をもっているので、肥前で鋳造されたこの系統の銅鐘を「肥前新鐘」と称したい。勿論これは半鐘に限らず江戸期に鋳造された谷口系の梵鐘にも適応する。谷口系の梵鐘が現存するのは、武雄市広福禅寺、長崎市晧臺寺、長崎県世知原町洞禅寺、長崎県鹿町町潮音院の4口を確認している。いずれも和鮮混淆式型で「肥前新鐘」の独特な様式をもっている。

「肥前新鐘」の原型とみられる朝鮮鐘と肥前鐘について簡単にふれてみると、朝鮮鐘は新羅、高麗、李朝期に鋳造されたものが我が国にもたらされた鐘で、現存するのは県下に恵日寺1口、全国には47口が見られる。これは和鐘にみられる袈裟襷文がなく、9個の乳、それを囲む乳郭、鐘身にみられる天女、飛天、笠形にみる突起帯、独特な竜頭、甬など和鐘と甚だしく様式を異にしている。また肥前鐘は県下で医王寺の1口だけ、全国で6口が確認されている。肥前国上松浦山下庄（場所不明）で鋳造されたもので、南北朝時代の梵鐘である。これは竜頭に三箇の透し宝珠があり、駒の爪は2段で、乳の形に独特な様式がみられる。「肥前新鐘」はこの両者の様式を加味した銅鐘である。

肥前新鐘にみる和鮮混淆式型の初現的な鐘は、応仁3年（1469）銘の対馬に所在する旧清玄寺梵鐘など慶長末年以前のものが全国で5口確認されている。この中3口は筑前芦屋の鋳物師によるもので、筑前芦屋をその発祥地とみてよい。また享禄5年（1532）大江宣秀在銘の山口県興隆寺の梵鐘は、乳座に8弁の花形座をもち、乳郭間に仏像を乳彫し、下帯に竜雲文を配するなど肥前新鐘の装飾形体に最も近い。

現在、判明している県下の肥前新鐘はカメラマン柿久勇、当館手塚静雄、志佐俥彦の提供を含めて130数口を数えている。県外では松岡史、織田武人の提供を含めて、長崎県、福岡県に数口みられる。この中、一番古い銘をもつ半鐘は、江北町竜沢寺の寛文2年(1662)、樹善兵衛征往在銘である。そして、宝永3年（1706）樹長右衛門行嵩（大和町聖光寺）の作例まで40口近くみることが出来る。谷口系は武雄市延応寺の寛文4年（1664）谷口相右衛門在銘が一番古く、その後明治年間まで90数口を確認しているが、実際はその数倍の存在が察せられる。

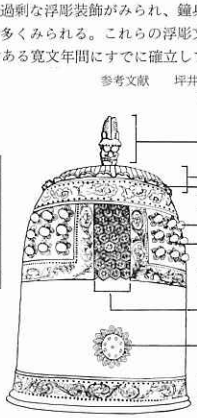
肥前新鐘の文様形式は、笠形に放射状に突き出た蓮弁（これを笠弁と呼ぶ）が樹系では始め二等辺三角形に近い単弁20～30数個がみられるが、後では刺突型に変わり10数個と弁数が少なくなる。谷口系では笠弁は原則として20前後の桜花型弁である。また乳座（乳の基部にある陽刻の花型浮彫文）は、樹系の7～8葉の桜花型弁（倒心型花弁）に対し、谷口系は5葉の桃花型弁（長楕円型花弁）である。撞座は蓮子文座が多いが、樹系には輪宝座、笹文座もみられる。また樹系では撞座の周辺に唐草文の浮彫文もみられる。これらの文様は、一概に谷口系は端整な装飾文であるのに対し、樹系は笠形や乳郭、乳座間にも過剰な浮彫装飾がみられ、鐘身に天女や菩薩像の浮彫が多くみられる。これらの浮彫文様は肥前新鐘の初現期である寛文年間にすでに確立しているといえる。

樹系肥前新鐘

銘「寛文四樹善兵衛政往作」

参考文献　坪井良平著　日本の梵鐘
同　朝鮮鐘
（資料係長　尾形善郎）

肥前新鐘部分名称



## 県内博物館案内　その9
## 有田町歴史民俗資料館

○　所在地　　西松浦郡有田町139-1　〒844
○　交通の便　国鉄佐世保線上有田駅下車徒歩15分　有田駅下車徒歩40分
○　開館時間　午前9時～午後4時30分
○　休館日　　月曜日　12月29日～1月3日
○　入館料　　一般100円（60円）　大学・高校生50円（30円）　小・中学生30円（20円）
※（　）内は20人以上の団体割引

○　設置の事由と目的

有田町教育委員会は歴史民俗資料館を設置するにあたり、『有田町の伝統産業である窯業も、今日の急速な発展と機械化の進歩に伴い、私達の祖先が使用した生産用具や民俗資料も、遠い昔のものになってしまおうとしております。

今日の文化遺産も、社会環境の変化で破壊の現状にあります。このような状況の中で有田町歴史民俗資料館は、これらの貴重な歴史的資料を収集整理し、調査研究を行い永久保存して一般に公開し、みなさんに有田の歴史と文化財に対する知識を深めていただき、先人のたゆみない労作にその努力のあとをしのび、伝統産業として有田焼の今後の発展を期して設置したものであります』、という事由と目的をかかげている。

○　設立の経過と特色

17世紀の初め、有田の東に位置する泉山において、白磁器を製作するのに必要な陶石が発見されると白磁器の生産が開始され、有田川の上流地域は川をはさんで集落が形成され一変してゆく。

元和末年から寛永初頭には、有田川の流域に白磁器を焼成する登り窯が各所に築造されたため、鍋島藩庁は燃料として使用する木材の確保と陶石の保護のため、統制に取りかかり、正保年間には有田皿山に代官所を設け、焼物生産の保護と育成に力を注ぎ込む。さらに17世紀中頃、東インド会社による長崎の出島を拠点とした海外への貿易が開始されると、磁器生産増大の計画が進められ、江戸時代後期には藩庁の財源確保をはかるため生産の増加と品質の向上に力を入れる。

このように有田町は、過去から現在にいたるまで肥前窯業史上重要な位置をしめるところから、当時製作された焼物や各地に点在する窯跡からの出土品・使用された各種道具・記録類等を、収集・保管・展示さらには調査や研究を行う目的で資料館建設が望まれていた。そこで、有田町教育委員会は有田磁器生産発祥の地である泉山の一角に建設することが計画された。昭和52年9月に、歴史民俗資料館建設敷地の無償貸与が石場組合によって承諾され、同年11月に建設が着工された。建物は壁面に有田の白タイルを使用した鉄筋コンクリート造り二階建で、昭和53年3月末には建設が完了した。

昭和53年10月17日には、有田町在住の蒲原氏によってヨーロッパで収集された「古伊万里」を一同に展観した、蒲原コレクション展による開館記念展が実施された。昭和55年11月には、有田町に県立九州陶磁文化館が開館して蒲原コレクションが移管されたため、その間に収集された記録類や民俗資料・登り窯の模型・製作工程写真パネル等によって、今は常設展が形成されている。泉山を訪ねる機会に歴史民俗資料館に足を運び焼物の歴史を偲ぶのも一興であろう。

○　施設の概要

敷地面積 7527.75㎡　建築面積 618.97㎡　総床面積 643.59㎡（一階449.22㎡・二階194.37㎡）

（主な部屋面積）　展示室 84.24㎡　収蔵庫 253.94㎡　荷解作業室・整理室 40.37㎡　事務室及び研修室 61.76㎡　エントラスホール 48.60㎡　前室（ロビー）4.7㎡　倉庫 80.02㎡　その他 69.96㎡

○　主な展示資料

- 登り窯の模型（10分の1）
- 町内各地で採集された陶磁片
- 焼物に関する生活用具
- 焼物の製作・工程用具
- 正司家・川内家・犬塚家・藤崎家関係の書籍及び古記録類　他

朝日氏によれば、佐伯のサインの99.9パーセントが黒色であり、茶色のサインが一次の（滞欧作）代表作中に２点あるがまったく例外のこととされている。

ちなみにその例外とは、1925年作「壁」にみるように、作中、サインは壁の面の他の活字にあわせた、いわばモチーフ化され、作品全体の色面において調和されたものとなっている。このことは、逆に、作品の色の効果をはかる上で、例えば当作品のように、人物との着衣との対応から、敢えて黒以外の色を使用することがあり得るということでもある。

註３　『佐伯祐三Ⅰ』－近代画家研究資料（東出版、昭和54年７月）

随筆・書簡抄の書簡(二)山田新一宛の長文の手紙であるが、この中には、二、三興味深いことが記されている。その一つは、佐伯が、当時、ヴラマンクの「物質主義」を踏まえながらも、ユトリロにひかれ、「アンシャンバリー」を目途としていること。また、これまでに２、３百枚描いた中、「今のところ10枚位気に入ったのがあるだけ」としていること。次にサロン・ドートンヌに出品し、入選したこと。また、帰国後の展覧会出品についても記され、1925年の佐伯を知る上で大変貴重なものとなっている。

註４　朝日晃『永遠の画家　佐伯祐三』P199-202（講談社、昭和53年９月）

このとき出品された19点

1、RUE PERNETY 2、RUE BRANCION 3、RUE DU DÉPART 4、壁 5、自動車小屋 6、LES JEUX DE NOEL 7、BIÉRE DU MESNIER 8、煙草屋 9、CORDONNERIE 10、BLANCHISSERIE 11、RUE DU GERGOVIE 12、AU PETIT SAUMUR 13、RUE LACORDAIRE 14、Bd. DE PORT ROYAL 15、CHAUDRONNERIE 16、八百屋 17、Av. VILLEMAIN 18、Bd. VAUGIRARD 19、町の展望

これらはいずれも1924年の夏以降の作品で、いわば、第１次滞仏時の代表作である。(傍点は筆者)

註５　同　上　P202

19点の作品は、街景を遠近法で捉えた作品群と、建物の一部で店のつくりの面白さを正面性だけで捉えた作品群がある。

（学芸員　松本誠一）

## 行事のお知らせ

### 常　設　展

| | |
|---|---|
| 佐賀県の歴史と文化展 | ７月８日～９月27日<br>12月13日～３月31日 |

### 企　画　展

| 展覧会名 | 会期 |
|---|---|
| 書作家協会展 | ８月５日～８月９日 |
| 九州新工芸展 | ８月21日～８月30日 |
| 理科作品展<br>佐賀市<br>佐賀県 | <br>９月13日～９月17日<br>９月19日～９月25日 |
| 近代の日本画展 | 10月８日～11月３日 |
| 佐賀県美術展 | 11月14日～11月23日 |
| 佐賀県高等学校芸術祭<br>書道・美術部門展 | 11月28日～12月４日 |
| 佐賀県学童美術展 | 12月13日～12月18日 |
| 書初展 | １月17日～１月21日 |
| 佐賀県勤労者美術展 | １月30日～２月４日 |
| 九州グラフィック・デザイン展 | ２月９日～２月14日 |
| 佐賀大学教育学部<br>美術工芸卒業制作展 | ２月20日～２月24日 |
| 岩永京吉・太田香雲展 | ３月11日～３月14日 |

休館日　●常設展　原則として日曜及び祝日の翌日
　　●企画展　原則として月曜日
　　●年末年始　12月28日～１月４日
開館時間　９時～４時30分（入館は４時まで）
観覧料　●常設展　大人500円　大高300円　中小200円
　　（　）内は団体20名以上
　　●特別展の場合は別に定めます
※都合により上記計画を一部変更することがあります。


| | |
|---|---|
| 博物館報 | 第53号 |
| 発行年月日 | 昭和56年８月１日 |
| 編集 | 永原正隆 |
| 発行 | 佐賀市城内１丁目15～23<br>佐賀県立博物館 |
| 印刷 | 佐賀印刷社 |


佐賀県立博物館
昭和
56.8.10